

原 著

看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の関連 (第一報)

Relationship between Vocational Readiness and Attitudes towards Ambiguity
among Nursing Students : the First Report

湯澤 淳 金子昌子
Jun Yuzawa Shoko Kaneko

獨協医科大学看護学部
Dokkyo Medical University, School of Nursing

要 旨

【目的】看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の関連を調査し、キャリア教育への示唆を得る。

【方法】A 学園内の大学と専門学校に通う看護学生 1,023 名に無記名自記式の質問紙を配布した。調査内容は、個人属性（年齢、性別、学年、社会人経験、進路決定タイプ）と職業レディネス（職業レディネス尺度）、曖昧さへの態度（曖昧さへの態度尺度）とした。分析は、記述統計、差の検定、多重比較を行った。

【結果】分析対象は 642 部（有効回答率 62.8%）であり、対象者は女性 572 名（89.1%）、平均年齢は 21.1 ± 2.9 歳、進路決定タイプは【早期決定型】が最も多かった。

職業レディネス尺度（中央値）は、社会人学生（68.1 点）が一般学生（60.7 点）に比べて有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。学年別では、第 1 学年（62.7 点）が第 4 学年（59.9 点）と第 2 学年（60.1 点）に比べて有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。

曖昧さへの態度尺度（中央値）の下位項目【曖昧さの享受】は、男性（4.5 点）が女性（4.3 点）に比べて有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。【曖昧さへの不安】は、一般学生（4.3 点）が社会人学生（4.1 点）に比べて有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。【曖昧さの受容】は、進路決定タイプにおいて【回避型】（3.9 点）が【出会い型】（3.6 点）と【途中変更型】（3.6 点）に比べて有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。【曖昧さの統制】は、社会人学生（4.9 点）が一般学生（4.5 点）に比べて有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。【曖昧さの排除】は、進路決定タイプにおいて【直前決定型】（3.9 点）が【早期決定型】（4.2 点）と【出会い型】（4.2 点）に比べて有意に低かった（ $p < 0.01$ ）。

【結論】今回、看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度についての実態が明らかになった。今後は、看護学生の職業レディネスを高めるための支援を曖昧さへの態度との関連から明らかにしていき、看護学生の曖昧さへの態度に応じた教育的介入について検討していく必要がある。

著者連絡先：湯澤 淳 獨協医科大学看護学部老年看護学
〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林 880
Email : j-yuzawa@dokkyomed.ac.jp

キーワード：職業レディネス，曖昧さへの態度，看護学生，キャリア教育

ABSTRACT

[Purpose] Our purpose was to investigate vocational readiness and attitudes toward ambiguity in nursing students.

[Methods] Surveys were distributed to 1,023 nursing students. The survey questions included personal attributes, the Vocational Readiness Scale and Attitude toward Ambiguity Scale.

[Results] Answers from 642 respondents [572 females, 70 males ; age 21.1 ± 2.9 yr (mean \pm standard deviation)] were included (valid response rate : 62.8%). The early-decision-making type was the most common type.

Students with work experience scored higher on the Vocational Readiness Scale than those who did not (68.1 vs. 60.7 points, median) ($p < 0.001$). According to school year, first-year students (62.7 points) scored significantly higher on the Vocational Readiness Scale than the fourth-year (59.9 points) and second-year students (60.1 points) ($p < 0.05$).

The score on “acceptance of ambiguity” was higher in males than in females (4.5 vs. 4.3 points). Students without work experience had a higher score on “anxiety toward ambiguity” than those with work experience (4.3 vs. 4.1 points) ($p < 0.0001$). Students with avoidance-of-career-decision-making pattern (3.9 points) had a higher score on “acceptance of ambiguity” than those with the encounter pattern or mid-avoidance pattern (3.6 points each) ($p < 0.01$ each). Students with work experience had a higher score on “control of ambiguity” than those who did not (4.9 vs. 4.5 points) ($p < 0.01$), and students with the predecessor pattern (3.9 points) had a lower score on “exclusion of ambiguity” than those with the early-decision or encounter pattern (4.2 points each) ($p < 0.01$ each).

[Conclusion] We clarified the work readiness and attitudes toward ambiguity among nursing students. Future studies need to investigate how nursing students can be supported to increase their vocational readiness according to their attitude towards ambiguity.

Keywords : vocational readiness, attitudes towards ambiguity, students nursing, education career.

I. 諸言

青年期後期にある大学生は、アイデンティティの確立に至る段階であり、職業決定はこの時期における最も重要な発達課題の1つである¹⁾。この時期にうまく職業を決定できず「職業的アイデンティティに安住することができない」場合は、アイデンティティの混乱が起こる²⁾。そのような中で、看護学生を含む医療系大学生は、一般の大学生と比較して将来の職業イメージが明確になっている場合が多い。看護学生が進路を決定するプロセスには、小学生の頃から看護職者になることを考えており、進路には納得している【早期決定型】、高校生・中学生時代に

何らかのきっかけで今の職業があることを知り、納得して進路を決めた【出会い型】、成績や周囲の反対等により大きな葛藤を伴いながら進路を変更した【途中変更型】、大学入試直前になって大きな葛藤を伴って決定した【直前決定型】、何となく大学に合格したが、進路に納得できていない【回避型】の5類型がある。その中で、看護学生は【早期決定型】が最も多いことが報告されている³⁾。【早期決定型】の学生は、幼い段階から将来の職業として看護職者になることを考えており、自分の進路に納得し自信をもっている。しかし、自らの進路や職業選択に自信をもっている一方で、入学後に看護実

践の現実に触れて徐々にその自信が低くなることも報告されている。さらに、【回避型】の看護学生は、具体的な職業イメージを持つことができているため、医療職に関するアイデンティティを持ちにくいことも報告されている³⁻⁵⁾。これらのことから、看護学生には看護学の学修支援とともに、看護職を目指すうえでの自信を高めるための支援を行う必要があると考える。これは、就学を継続するための支援のみならず就職後も自らの選択に自信をもって職業を継続するための支援にも繋がると考える。

看護学生が専門職業人として就業していくための心理的準備状況は職業レディネスと呼ばれ、多くの大学で職業体験やインターンシップなどによって職業レディネスを整えるための取り組みが行われている。看護学生が「看護師として就業する将来の自分を具体的に描けるように促すことは、学生の職業レディネスを高める⁴⁾」ことから、実習で実際の臨床現場で患者を受け持ち、必要となる看護について考え、実践とリフレクションを繰り返すことによって看護職としての自信を高め、自らの職業レディネスを高めていくと考える。これは、看護学生が自信をもって看護職として就職していくことに繋がり、看護職者として就業を継続していく上での信念にも影響するといえる。

また、看護学生が実習を行う臨床現場では、患者やその家族の意思や希望を優先しながら、様々な専門職と協働し、刻々と変化する患者の病態に向き合っていく必要がある。「医師や看護師が臨床現場で遭遇する多種多様な事象や提供される情報には、科学実験とは異なり、かなりの曖昧さやおおまかさがつきもの⁶⁾」であり、看護学生も学修や実習を通して、看護場面や人間関係上の様々な曖昧さを経験していくと考える。

曖昧さとは、十分な手がかりがないために適切な構造化や分類化ができない状態であり、①手がかりが全くない新しい状況、②考慮すべき手がかりがありすぎる複雑な状況、③個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況⁷⁾をいう。看護学生が体験する曖昧な状況で

は、①手がかりが全くない新しい状況として、初めての实習でどのように振る舞えばよいか、何を優先して行動したらよいかわからない状況、②考慮すべき手がかりがありすぎる複雑な状況として、患者やその家族とコミュニケーションをする中で、相手の真意や希望をうまくつかめない状況、③個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況として、指導者によってアドバイスの内容が異なっている状況などが考えられる。看護学生は曖昧な状況の中で、自ら考え、判断することが求められるが、曖昧な状況に上手く適応できない看護学生は、徐々に自信を無くしモチベーションを低下させてしまうのではないかと考える。人は曖昧さを知覚したとき、不安が喚起されることもあれば、安定して受け入れられることや、おもしろさを発見することから⁸⁾、曖昧な状況を肯定的に受け止められる学生ほど対人援助職である看護職に魅力を感じ、職業レディネスを高めていくのではないかと推測する。

これまで、看護分野では曖昧さについて、主に看護職の役割や患者の体験の文脈で述べられてきた。例えば、看護職の役割では、役割の曖昧さは組織コミットメントや燃え尽きに直接に影響していること、専門看護師は曖昧な役割認識のなかで悩みながら6~10年をかけて役割を獲得していること、中堅看護師は看護師の役割が曖昧なことで離職意図を持つこと、などである⁹⁻¹¹⁾。患者の体験では、思春期前期の胆道閉鎖症患児は療養行動への意味付けが曖昧であること、成人期発症1型糖尿病患者は将来の見通しに曖昧さを感じていること、ICUで人工呼吸器を装着している患者は時間や身体感覚の曖昧さに苦悩していること、などである¹²⁻¹⁴⁾。しかし、看護学生や看護職者の曖昧さへの態度を明らかにした研究は、調べた限り見当たらなかった。そこで、本研究の目的は、看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の関連を調査し、キャリア教育への示唆を得ることとした。これによって、看護学生の曖昧さへの態度に応じた教育的介入への示唆を得ることができ、看護学生の職業レディネスを高め、専門職としての成

長を支援することに寄与できると考える。

本研究では、第一報として、看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の実態に焦点を絞り報告する。

II. 用語の定義

1) 職業レディネス

独立行政法人労働政策研究・研修機構では、生徒や学生、求職者が自己理解を深め、職業意識を啓発するためのツールとして「職業レディネス・テスト」を開発し、進路指導や職業指導に活用している。この中で、室山は、職業レディネスを「個人の根底にあって、将来の職業選択に影響を与える心理的な構え」と定義している¹⁵⁾。また、職業レディネスは「就職を控えた学生が、職業に就くことに対し、その程度の成熟した考えをもっているかを表す概念」、「職業人として自立するための心理的準備状態」と定義されている¹⁶⁻¹⁷⁾。

看護学生は、看護系の大学や専門学校に入学している時点である程度の職業選択はなされており、将来看護職として就職するための準備段階にあると考えることができる。そのため、本研究では、職業レディネスを「職業人として自立するための心理的準備状態」と定義する。

2) 曖昧さ

Budner は、曖昧さを「十分な手がかりがないために適切な構造化や分類化ができない状態であり、新奇性（手がかりが全くない新しい状況；novelty）と複雑性（考慮すべき手がかりがありすぎる複雑な状況；complexity）、不可解性（個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況；insolubility）の3つがある⁷⁾」と定義した。

看護学生も、初めての實習でどのように振る舞えばよいか、何を優先して行動したらよいかわからない状況などの手がかりが全くない新しい状況である「新奇性」、患者やその家族とコミュニケーションをする中で、相手の真意や希望をうまくつかめない状況などの考慮すべき手がかりがありすぎる複雑な状況である「複雑性」、指導者によってアドバイスの内容が異な

っている状況などの個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況である「不可解性」を経験すると考える。そのため、本研究においても Budner に従って曖昧さを定義する。

3) 曖昧さへの態度

西村（2007）は、曖昧さへの態度を「曖昧な刺激の処理において生じる、認知的、情緒的反応パターン⁸⁾」と定義した。本研究ではこの定義を踏まえ、「看護学生が曖昧な状況に直面したときの認知的、情緒的反応パターン」と定義する。なお、曖昧さへの態度は【曖昧さの享受】【曖昧さへの不安】【曖昧さの受容】【曖昧さの統制】【曖昧さの排除】の5つの下位項目から構成されている。【曖昧さの享受】は曖昧さを魅力的なものとして評価し、関与していくことに楽しみを見出す傾向を表し、【曖昧さへの不安】は曖昧さに不安などの情緒的混乱と、それに伴う対処の難しさを感じる傾向を表し、【曖昧さの受容】は曖昧さをそのまま認めて受け入れられる、曖昧さへの親和性や寛容さを表す傾向を表し、【曖昧さの統制】は、曖昧な状況を否定的に評価し、知的に把握・対処（統制）しようとする傾向を表し、【曖昧さの排除】は曖昧さを認めず、排除して白黒つけたい傾向を表す⁸⁾。

III. 研究方法

1. 対象

研究実施可能性の観点より、便宜的に A 学園内のそれぞれ2つの大学と専門学校に通う看護学生を対象とした。学部長もしくは学校長に対して研究協力の依頼文を用いて口頭で説明を行い、研究実施の同意を得た。その後、2019年1～3月に4施設に通う看護学生1,023名の対象者に口頭で研究の説明を行い、調査趣意書、無記名自記式の質問紙を配布した。質問紙は、回答後対象者により個別に厳封され、留置き法によって回収したのち、研究者宛てに返送された。

2. 調査内容：

1) 個人属性

年齢、性別、学年、社会人経験の有無、近親者の看護職者の有無、進路決定タイプについて尋ねた。

2) 職業レディネス

職業レディネス尺度¹⁵⁾を用いた。全21項目、「非常にあてはまる」～「まったくあてはまらない」の4段階のリッカート尺度で評定を求めた。なお、この尺度は人文・保育・看護系学生の計875名を対象に信頼性と妥当性が確認されている¹⁸⁾（信頼性・内部整合性・基準妥当性）。

3) 曖昧さへの態度

曖昧さへの態度尺度⁸⁾を用いた。この尺度は【曖昧さの享受】【曖昧さへの不安】、【曖昧さの受容】、【曖昧さの統制】、【曖昧さの排除】の5つの下位項目で構成される。全26項目、「非常にあてはまる」～「まったくあてはまらない」の6段階のリッカート尺度で評定を求めた。なお、この尺度は大学生437名を対象に信頼性と妥当性が確認されている⁸⁾（信頼性・基準妥当性）。

3. 分析方法

看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の特徴を探るため、対象者の個人属性と職業レディネス尺度と曖昧さへの態度尺度について記述統計を算出し、教育課程別（大学・専門学校）で性別、年齢、社会人経験の有無、近親者看護師について χ^2 検定を用いて分析した。また、各尺度の内的整合性（以下、 α 係数）の確認を行った。次に、職業レディネス尺度と曖昧さへの態度尺度の下位項目それぞれに対する個人属性（年齢、性別、学年、社会人経験の有無、近親者の看護職の有無、進路決定タイプ）による差を検討するために、Mann-WhitneyのU検定及びKruskal-Wallisの検定、その後の多重比較を行った。なお、解析ソフトにはIBM SPSS Statistics 25を用いた。検定はすべて両側検定とし、有意水準は5%とした。

4. 倫理的配慮

対象の学部長もしくは学校長に対し、研究目的の説明を行い、署名による研究同意を得た。また、調査対象者である看護学生に対しては、説明時に研究協力の任意性と撤回の自由、個人情報特定されないよう処理した上で研究に利用すること、情報漏洩がないよう情報管理に努めることを説明した。さらに、質問紙に研究参加への同意の有無を確認する事項へのチェック

及び返信をもって同意と見なした。なお、本研究は獨協医科大学看護研究倫理委員会の承認を得て実施した（看護30038）。

IV. 研究結果

1. 分析対象者の基本属性と特徴

回収した687部（回収率67.2%）のうちから、無記入や回答に不備があったものを分析対象から除外し、642部（有効回答率62.8%）を分析対象とした。

対象者の基本属性は、女性572名（89.1%）、平均年齢 21.1 ± 2.9 歳であり、学年は、第3学年が最も多い244名（38.0%）、社会人経験がある学生（以下、社会人学生）は43名（6.7%）、近親者に看護師看護師がいる学生は214名（33.3%）だった。進路決定タイプは、【早期決定型】が最も多かった。教育課程別で差の検討を行った結果、社会人経験の有無にのみ有意差を認めた（ $p < 0.001$ ）。基本属性と特徴を表1に示す。

2. 各尺度の平均得点と標準偏差及び α 係数

職業レディネス尺度と曖昧さへの態度尺度の下位項目の平均得点と標準偏差及び α 係数を求めた。職業レディネス尺度得点は61.0（ ± 7.7 ）点であり α 係数0.81を示した。曖昧さへの態度尺度得点は、【曖昧さの享受】が4.3（ ± 0.8 ）点であり α 係数0.82、【曖昧さへの不安】が4.3（ ± 0.8 ）点であり α 係数0.77、【曖昧さの受容】が3.7（ ± 0.8 ）点であり α 係数0.70、【曖昧さの統制】が4.6（ ± 0.7 ）点であり α 係数0.71、【曖昧さの排除】が4.1（ ± 1.0 ）点であり α 係数0.80であった。教育課程別では、曖昧さの受容のみ有意差を認めた（ $p < 0.001$ ）。（表2）。

3. 対象者の背景による各尺度の比較

1) 職業レディネス

職業レディネスについて、社会人学生と社会人経験が無い看護学生（以下、一般学生）の中央値を比較したところ、社会人学生は68.1点、一般学生は60.7点で、社会人学生は一般学生に比べて有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。また、職業レディネスについて、各学年の中央値を比較したところ、第1学年は62.7点、第4学年は59.9点、第2学年は60.1点で、第1学年は

表1 対象者の基本属性と特徴

n = 642

		全体	教育課程別			χ^2 検定 <i>p</i> 値
			大学 n = 337	専門学校 n = 305		
個人属性						
性別	女性	572 (89.1)	294 (87.2)	278 (91.2)	0.113	
	男性	70 (10.9)	43 (12.8)	27 (8.9)		
年齢		21.1 ± 2.9	21.3 ± 3.0	20.9 ± 2.9		
学年	第1学年	137 (21.3)	41 (12.2)	96 (31.5)	0.000	
	第2学年	159 (24.8)	70 (20.8)	89 (29.2)		
	第3学年	244 (38.0)	124 (36.8)	120 (36.3)		
	第4学年	102 (15.9)	102 (30.3)			
社会人経験の有無	有	43 (6.7)	9 (2.7)	34 (11.2)	0.000	
	無	599 (93.3)	328 (97.3)	271 (88.9)		
近親者看護師	有	214 (33.3)	109 (32.3)	105 (34.3)	0.576	
	無	428 (66.7)	228 (67.7)	200 (65.67)		
進路決定タイプ	早期決定型	278 (43.3)	140 (41.5)	138 (45.3)	0.702	
	出会い型	47 (7.3)	28 (8.3)	19 (6.2)		
	途中変更型	126 (19.6)	70 (20.8)	56 (18.4)		
	直前決定型	53 (8.3)	26 (7.7)	27 (8.9)		
	回避型	138 (21.5)	73 (21.7)	65 (21.3)		

表中の数字は n (%) を示す。

表2 最各尺度の平均得点と標準偏差及び α 係数

n = 642

		全体		教育課程別				<i>p</i> 値	α 係数
		mean (SD)	中央値	大学 n = 337		専門学校			
				mean (SD)	中央値	mean (SD)	中央値		
職業レディネス	(range 40-71)	61.0 (7.7)	61.0	60.3 (7.8)	61.0	61.8 (7.6)	61.0	0.140	0.81
曖昧さへの態度									
曖昧さの享受	(range 1-6)	4.3 (0.8)	4.3	4.3 (0.7)	4.3	4.3 (0.8)	4.3	0.780	0.82
曖昧さへの不安	(range 1-6)	4.3 (0.8)	4.3	4.3 (0.8)	4.3	4.3 (0.8)	4.3	0.938	0.77
曖昧さの受容	(range 1-6)	3.7 (0.8)	3.6	3.8 (0.8)	3.8	3.6 (0.8)	3.6	0.000	0.70
曖昧さの統制	(range 1-6)	4.6 (0.7)	4.6	4.5 (0.7)	4.4	4.6 (0.7)	4.6	0.010	0.71
曖昧さの排除	(range 1-6)	4.1 (1.0)	4.0	4.1 (1.0)	4.0	4.2 (1.0)	4.3	0.021	0.80

*** $p < 0.001$

Whitney の U 検定

第4学年と第2学年に比べて有意に高かった ($p < 0.05$). さらに, 職業レディネスについて, 進路決定タイプ毎の中央値を比較したところ, 【早期決定型】は63.4点, 【出会い型】は63.7点, 【途中変更型】は61.3点, 【直前決定型】は58.5点, 【回避型】は53.0点で, 【回避型】は他のす

べての類型に比べて有意に低く ($p < 0.001$). 【直前決定型】は【早期決定型】と【出会い型】に比べて有意に低かった ($p < 0.001$). (表3)
2) 曖昧さへの態度の下位項目【曖昧さの享受】
【曖昧さの享受】について, 女性と男性の中央値を比較したところ, 女性は4.3点, 男性は

表3 対象者の背景による職業レディネスの比較

n = 642

		n	%	中央値	u 値 / H 値	p 値	多重比較 (有意確率)
性別	女	572	89.1	61.3	19490.5	0.718 ¹⁾	
	男	70	10.9	59.8			
社会人経験	有り	43	6.7	68.1	7696.0	0.000 ¹⁾	
	無し	599	93.3	60.7			
近親者の看護職者	有り	214	33.3	62.1	42422.5	0.128 ¹⁾	
	無し	428	66.7	60.8			
学年	1	137	21.3	62.7	12.6	0.006 ²⁾	1>4 (0.018)
	2	159	24.8	60.1			1>2 (0.036)
	3	244	38.0	61.6			
	4	102	15.9	59.9			
進路決定プロセス	早期決定型	278	43.3	63.4	105.6	0.000 ²⁾	直>回 (0.000)
	出会い型	138	21.5	63.7			途>回 (0.000)
	途中変更型	47	7.3	61.3			早>回 (0.000)
	直前決定型	126	19.6	58.5			出>回 (0.000)
	回避型	53	8.3	53.0			早>直 (0.000) 出>直 (0.000)

1) Mann-Whitney の U 検定 2) Kruskal-Wallis の検定

表4 対象者の背景による「曖昧さの享受」の比較

n = 642

		n	%	中央値	u 値	p 値	多重比較 (有意確率)
性別	女	572	89.1	4.3	17132.0	0.048 ¹⁾	
	男	70	10.9	4.5			
社会人経験	有り	43	6.7	4.5	10939.0	0.098 ¹⁾	
	無し	599	93.3	4.3			
近親者の看護職者	有り	214	33.3	4.3	44914.0	0.690 ¹⁾	
	無し	428	66.7	4.3			
学年	1	137	21.3	4.4	8.5	0.036 ²⁾	1>2 (0.036)
	2	159	24.8	4.2			
	3	244	38.0	4.3			
	4	102	15.9	4.3			
進路決定プロセス	早期決定型	278	43.3	4.3	6.2	0.188 ²⁾	
	出会い型	47	7.3	4.3			
	途中変更型	126	19.6	4.4			
	直前決定型	53	8.3	4.3			
	回避型	138	21.5	4.1			

1) Mann-Whitney の U 検定 2) Kruskal-Wallis の検定

4.5点で、男性は女性に比べて有意に高かった($p < 0.05$)。また、【曖昧さの享受】について、学年毎の中央値を比較したところ、第1学年は4.4点、第2学年は4.2年で、第1学年は第2

学年に比べて有意に高かった($p < 0.05$)。(表4)

3) 曖昧さへの態度の下位項目【曖昧さへの不安】

【曖昧さへの不安】について、社会人学生と

表5 対象者の背景による「曖昧さへの不安」の比較

n = 642

		n	%	中央値	u 値	p 値
性別	女	572	89.1	4.3	18038.0	0.175 ¹⁾
	男	70	10.9	4.2		
社会人経験	有り	43	6.7	4.1	10564.5	0.048 ¹⁾
	無し	599	93.3	4.3		
近親者の看護職者	有り	214	33.3	4.3	42972.0	0.201 ¹⁾
	無し	428	66.7	4.3		
学年	1	137	21.3	4.2	2.4	0.502 ²⁾
	2	159	24.8	4.3		
	3	244	38.0	4.3		
	4	102	15.9	4.3		
進路決定プロセス	早期決定型	278	43.3	4.3	2.1	0.717 ²⁾
	出会い型	47	7.3	4.3		
	途中変更型	126	19.6	4.2		
	直前決定型	53	8.3	4.3		
	回避型	138	21.5	4.3		

1) Mann-Whittney の U 検定 2) Kruskal-Wallis の検定

表6 対象者の背景による「曖昧さの受容」の比較

n = 642

		n	%	中央値	u 値	p 値	多重比較 (有意確率)
性別	女	572	89.1	3.6	17170.5	0.051 ¹⁾	
	男	70	10.9	3.9			
社会人経験	有り	43	6.7	3.7	12628.5	0.831 ¹⁾	
	無し	599	93.3	3.7			
近親者の看護職者	有り	214	33.3	3.7	45587.5	0.925 ¹⁾	
	無し	428	66.7	3.7			
学年	1	137	21.3	3.7	0.5	0.911 ²⁾	
	2	159	24.8	3.7			
	3	244	38.0	3.6			
	4	102	15.9	3.7			
進路決定プロセス	早期決定型	278	43.3	3.6	17.7	0.001 ²⁾	回>出 (0.002) 回>早 (0.025)
	出会い型	47	7.3	3.6			
	途中変更型	126	19.6	3.6			
	直前決定型	53	8.3	3.8			
	回避型	138	21.5	3.9			

1) Mann-Whittney の U 検定 2) Kruskal-Wallis の検定

一般学生の中央値を比較したところ、社会人学生は4.1点、一般学生は4.3点で、一般学生は社会人学生に比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。 (表5)

4) 曖昧さへの態度の下位項目【曖昧さの受容】

【曖昧さの受容】について、進路決定タイプ毎の中央値を比較したところ、【回避型】は3.9点、【出会い型】は3.6点、【途中変更型】は3.6点で、【回避型】は【出会い型】と【途中変更型】

表7 対象者の背景による「曖昧さの統制」の比較

n = 642

		n	%	中央値	u 値	p 値
性別	女	572	89.1	4.6	19494.5	0.719 ¹⁾
	男	70	10.9	4.6		
社会人経験	有り	43	6.7	4.9	10100.0	0.018 ¹⁾
	無し	599	93.3	4.5		
近親者の看護職者	有り	214	33.3	4.6	42425.0	0.127 ¹⁾
	無し	428	66.7	4.5		
学年	1	137	21.3	4.6	3.5	0.327 ²⁾
	2	159	24.8	4.5		
	3	244	38.0	4.6		
	4	102	15.9	4.6		
進路決定プロセス	早期決定型	278	43.3	4.6	6.4	0.170 ²⁾
	出会い型	47	7.3	4.6		
	途中変更型	126	19.6	4.7		
	直前決定型	53	8.3	4.5		
	回避型	138	21.5	4.4		

1) Mann-Whittney の U 検定 2) Kruskal-Wallis の検定

表8 対象者の背景による「曖昧さの排除」の比較

n = 642

		n	%	中央値	u 値	p 値	多重比較 (有意確率)
性別	女	572	89.1	4.1	19685	0.818 ¹⁾	
	男	70	10.9	4.1			
社会人経験	有り	43	6.7	4.2	12466	0.724 ¹⁾	
	無し	599	93.3	4.1			
近親者の看護職者	有り	214	33.3	4.2	42335	0.116 ¹⁾	
	無し	428	66.7	4.1			
学年	1	137	21.3	4.3	10.3	0.016 ²⁾	
	2	159	24.8	4.2			
	3	244	38.0	4.1			
	4	102	15.9	3.9			
進路決定プロセス	早期決定型	278	43.3	4.2	15.5	0.004 ²⁾	早>直 (0.016) 出>直 (0.029)
	出会い型	47	7.3	4.2			
	途中変更型	126	19.6	4.2			
	直前決定型	53	8.3	3.9			
	回避型	138	21.5	4.0			

1) Mann-Whittney の U 検定 2) Kruskal-Wallis の検定

に比べて有意に高かった ($p < 0.01$). (表6)

5) 曖昧さへの態度の下位項目【曖昧さの統制】

【曖昧さの統制】について、社会人学生と一般学生の中央値を比較したところ、社会人学生は 4.9 点、一般学生は 4.5 点で、社会人学生は

一般学生に比べて有意に高かった ($p < 0.05$).

(表7)

6) 曖昧さへの態度の下位項目【曖昧さの排除】

【曖昧さの排除】について、学年毎の中央値を比較したところ、第1学年は 4.3 点、第2学

年は4.2点、第3学年は4.1点、第4学年は3.9点であり、学年間では有意な差を認めたが（ $p < 0.05$ ）、その後の多重比較では有意差を認めなかった。また、【曖昧さの排除】について、進路決定タイプ毎の中央値を比較したところ、【早期決定型】は4.2点、【出会い型】は4.2点、【直前決定型】は3.9点であり、【早期決定型】と【出会い型】は【直前決定型】に比べて有意に高かった（ $p < 0.01$ ）。（表8）

V. 考察

1. 職業レディネス

看護学生の職業レディネスは、大学と専門学校の教育課程では有意な差を認めなかった。一方、社会人学生は、一般学生に比べて有意に職業レディネスが高かった。社会人学生は、一般学生に比べて目的意識や知的欲求が高く、そのことが学習意欲となり学校生活に充実感をもっており¹⁹⁾、看護師国家資格取得という自立・自律に繋がる明確な動機と家族の支えがあり、学びつつけている²⁰⁾。そのため、看護職になるための心理的な準備状況である職業レディネスが高い結果を示したと推察する。さらに、社会人学生は、一度看護職以外の道に進んだが、何らかの理由によって「これまでの生き方の見直しを迫られ²¹⁾」ることによって改めて看護職への道に進んだため、一般学生に比べて看護職として働きたいという意志が強いことから職業レディネスが高かったと考える。

看護学生の職業レディネスは、学年別では第1学年が最も高く、第4学年が最も低かった。看護学生は実習の中で「知識量の乏しさと活用度の低さによるクライアント状態に応じた看護過程展開難航」や「看護を学ぶ学習者としての素養の乏しさと欠落による自信喪失」を経験する²²⁾。そのため、学年が上がり様々な実習を積み重ねていく中で、自らの学修不足と実践力不足を実感して職業レディネスは低下すると考える。また、進路決定タイプでは【早期決定型】と【出会い型】が最も高かった。【早期決定型】と【出会い型】は、明確な職業イメージを持ち、決定置いて主体性を強く持ち、大きな問題もな

く、スムーズな決定を行っていた²³⁾ことから、看護職を目指す学生としての心構えができており、職業レディネスも高い傾向にあるといえる。一方、【回避型】はその他の類型と比較して職業レディネスが最も低く、職業イメージが明瞭ではなく、決定における主体性が他の類型よりも低く、決定プロセスが順調であったとはいえない²³⁾。【回避型】は、職業イメージが明確にならないまま就学を継続していることが考えられ、職業レディネスが低かったのではないかと考える。

2. 曖昧さへの態度

看護学生の曖昧さへの態度は、【曖昧さの統制】が最も高かった。【曖昧さの統制】は、「情報がたりないと動きづらいので、できるだけ情報を集めたい」や「いろいろな可能性がある時には、さまざまなことを考慮して対処法を考えておきたい」などの質問項目から構成され、曖昧な状況を否定的に評価し、知的に把握・対処（統制）しようとする傾向⁸⁾である。これは、看護職者がケアの対象者の疾患や病態、生活背景などについてアセスメントを行って患者の生活課題や看護の必要性を見出すために必要な能力であると考えられる。そのため、看護学生は学修過程において曖昧さを統制しようとする態度が強化され、十分な情報がないなどの曖昧な状況に対して積極的に関わり、主体的に情報を得ていく姿勢が涵養されていると推察する。

また、【曖昧さの統制】は社会人学生の方が有意に高かった。社会人学生は、社会人としての職業経験を通して、わからないことや難しいと感じられることは事前に自らの責任において把握・対処しておいた方がよいことを学んでいると考える。そのため、一般学生と比べて【曖昧さの統制】がより高く、曖昧な状況に対して積極的に関わっていく傾向にあったと推察する。

一方、看護学生の曖昧さへの態度では、【曖昧さの受容】が最も低かった。【曖昧さの受容】は、「不完全なことがあるからおもしろい」「不完全なところも、ある程度受け入れられる」などの質問項目で構成される。【曖昧さの受容】

は曖昧さをそのまま認めて受け入れられる、曖昧さへの親和性や寛容さを表し⁸⁾、曖昧さへの態度のポジティブな側面とされている。しかし、看護学生は曖昧な状況をただ受け入れるだけではなく、曖昧さに興味持って積極的に関わろうとする態度を備えていると考えることから、【曖昧さの受容】が最も低かったのではないかと考える。また、【曖昧さの受容】は教育課程別において唯一差を認め、専門学校生の方が大学生に比べて高かった。専門学校の入学者は、20才未満は多いが20才～34才も多く、広い年齢層の入学者が存在し、その中には一般の大学卒も含まれており²⁴⁾、20歳未満の入学者が多い大学に比べて多様な背景をもつ学生同士の交流があることが、曖昧さを受け入れるという態度に関連しているのではないかと考える。

一般大学における大学生（以下、一般大学生）の曖昧さへの態度を調査した先行研究では、【曖昧さの享受】と【曖昧さの統制】が最も高く（いずれも平均4.3点）、【曖昧さの排除】が最も低かった（平均3.7点）ことが報告されている⁸⁾。曖昧さに積極的に関与しようとする【曖昧さの享受】と曖昧さに対して知的に対処しようとする【曖昧さの統制】が高いことから、一般大学生の曖昧さへの態度の特徴として、自らの興味関心領域で学修を進めていく中で、未知の知識を積極的に学び探求していこうとする様相があると考えられる。これに対して、本研究の結果、看護学生は【曖昧さの統制】が最も高く（平均4.6点）、【曖昧さの受容】が最も低かった（平均3.7点）。【曖昧さの統制】が最も高い点は一般大学生と同様であったが、曖昧さの態度のポジティブな面である【曖昧さの受容】と【曖昧さの享受】が一般大学生よりも低かった。【曖昧さの受容】は、「今あるものを変容していこうという意志に欠ける側面を表している²⁵⁾」ことが指摘されている。一方、【曖昧さの受容】は曖昧さを受け入れることで、【曖昧さの統制】が関連している、物事を確認しないと不安に陥ってしまう強迫傾向を緩和する側面も報告されている⁸⁾。以上のことから、【曖昧さの統制】が高く【曖昧さの受容】が低い看護学生は、曖昧

さに対して否定的な傾向が強く、曖昧さを積極的に解消するように介入しようとする一方で、一般大学生に比べて強迫傾向に陥って心理的なストレスを受けやすい特徴をもっていると推察する。そのため、看護学生には曖昧さをそのまま受け入れることができる態度の涵養についても検討していく必要があると考える。

今後は、看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の関連を明らかにしていき、看護学生の曖昧さへの態度特性に応じた教育的介入への示唆を得ていく必要がある。

VI. 結語

看護学生は、社会人学生が一般学生に比べて職業レディネスが有意に高かった。また、学年が上がり様々な実習を積み重ねていく中で、自らの学修不足と実践力不足を実感して職業レディネスは低下していた。

看護学生は、曖昧さに対して否定的な傾向が強く、曖昧さを積極的に解消するように介入しようとする一方で、一般大学生に比べて強迫傾向に陥って心理的なストレスを受けやすい特徴をもっていると推察された。今後は、看護学生の職業レディネスと曖昧さへの態度の関連を明らかにしていき、看護学生の曖昧さへの態度特性に応じた教育的介入への示唆を得ていく必要がある。

謝辞

本研究に快くご協力くださいました看護学生の皆様、大学および専門学校関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本研究は、平成30年度獨協医科大学看護学部共同研究費による研究助成（若手研究）を受けたものです。

文献

- 1) 前田智香子：専門家の職業的アイデンティティ形成の研究に必要な視点、文学部心理学論集、3：5-14、2009.
- 2) エリクソン、E. H./岩瀬庸理：アイデンティティ青年と危機、172、金沢文庫、東京、1950.
- 3) 落合幸子、本多陽子、落合良行、他：医療系大

- 学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連, 医学教育, 37(3):141-149, 2006.
- 4) 平間あゆみ, 長江美代子: 看護大学4年生の職業レディネスに関する研究, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8(1):121-133, 2013.
 - 5) 藤森由子, 藤田絹代, 鈴木智子, 他: 地方私立看護系大学生における職業的アイデンティティと進路決定プロセスの関連, 日本看護学教育学会誌, 27(1):53-60, 2017.
 - 6) 小泉俊三, 平尾智広, 有吉浩美: 系統看護学講座 専門基礎分野健康支援と社会保障制度1 総合医療論 第3版【電子版】, 医学書院, 5-6, 2018.
 - 7) Budner, S: Intolerance of ambiguity as a personality variable. J Pers, 30:29-50, 1962.
 - 8) 西村佐彩子: 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性ととの比較を通して, パーソナリティ研究, 15(2):183-194, 2007.
 - 9) Han Sang-Sook, Han Jeong-Won, An Young-Suk, Lim So-Hee: Effects of role stress on nurses' turnover intentions: The mediating effects of organizational commitment and burn-out, Jpn J Nurs Sci, 12(4):287-296, 2015.
 - 10) 田中久美子: 日本の専門看護師が役割を獲得するまでの内面的成長プロセス, 日本看護研究学会雑誌, 38(1):127-137, 2015.
 - 11) 瀬川有紀子, 石井京子: 中堅看護師の離職意図の要因分析 役割ストレスと役割業務負担感の関連から, 大阪市立大学看護学雑誌, 6:11-18, 2010.
 - 12) 平塚克洋, 中村伸枝, 佐藤奈保: 胆道閉鎖症をもつ思春期前期患児における療養行動の意味づけ, 日本小児看護学会誌, 26:91-96, 2017.
 - 13) 高樽由美, 藤田佐和: 成人期発症1型糖尿病患者の療養体験に関する研究, 日本糖尿病教育・看護学会誌, 20(2):201-209, 2016.
 - 14) 野口綾子, 井上智子: Light sedation (浅い鎮静) 中のICU人工呼吸器装着患者の体験, 日本クリティカルケア看護学会誌, 12(1):39-48, 2016.
 - 15) 室山晴美: 職業レディネス・テスト [第3版] の開発, 職業研究, 48-53, 一般社団法人雇用問題研究会, 2006.
 - 16) 堀洋道, 松井豊, 山本真理子: 心理尺度ファイル—人間と社会を測る, 483, 垣内出版, 東京, 1994.
 - 17) 飯島佐知子, 賀沢弥貴, 平井さよ子: 自己効力感および職業レディネスによる看護大学生の看護管理実習の効果の評価に関する研究, 愛知県立看護大学紀要, 14:9-18, 2008.
 - 18) 若林満, 後藤宗理, 鹿内啓子: 職業レディネスと職業選択の構造—保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識の関連, 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 30:63-98, 1983.
 - 19) 前田幹香: 社会人経験をもつ看護学生の学校生活に関する認知の特性, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 29:123-129, 2004.
 - 20) 魚住郁子, 近藤裕子, 野田貴代: 社会人経験のある看護学生が学校生活の中で学びつづけていくプロセス—学びの深化に関する体験の語り—to注目して, 日本看護学教育学会誌, 25:41-50, 2015.
 - 21) 伊東美智子: 社会人看護師が看護師を目指すに至った経緯—当事者たちの語りから, 神戸常盤大学紀要, 12:57-64, 2019.
 - 22) 山下暢子, 舟島なをみ, 中山登志子: 看護学実習中の学生が直面する問題—学生の能動的学修の支援に向けて, 看護教育学研究, 27(1):51-65, 2018.
 - 23) 本多陽子, 落合幸子: 医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み—進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討, 茨城県立医療大学紀要, 11:45-54, 2006.
 - 24) 柏田 三千代: 看護師等養成所入学者の年代と学歴別の進路傾向, 日本国際情報学会誌国際情報研究, 14(1):74-83, 2017.
 - 25) 西村佐彩子: 曖昧さへの態度と自己志向的完全主義の関連, 京都教育大学紀要:123-112, 2013.